

テント一週一文（み）—— 梅田裁判高裁判決の傍聴記

（承前）

甘酒さんは妙にうれしそうな、そして幾分意地悪そうな顔をしています。うれしそうなのは自分の持ってきた甘酒を喜んで飲んでくれているからでしょう。彼女は素直で、人の悪意ある発言も善意に解する性分なのです。その甘酒さんが意地悪そうにしている理由が分かりません。

山下さんが怪訝そうな声で「どうしたの？」と尋ねたのと、私が「何か？」と尋ねたのはほとんど同時でした。

甘酒さん（以下、甘と表記）「もう一つあるのよ」

山下さん（以下、山と表記）「えっ？ 甘酒以外にまだ何か持ってきていただいたの？ 何か食べるもの？ 有り難いわ～」

甘「食べるものじゃなくて、見るもの」

山「あっ、そう」と、あまり関心はなさそうです。

甘「傍聴記」

山「裁判の？ 見せて！」 裁判となると食べ物以上に興味を示す山下さんです。

甘「12月4日の梅田裁判のものよ」

山「この日は、私は行けなかったけど、判決主文朗読だけで5秒で終わったそうね」

甘「その分、その後の報告集会は長かったわよ」

山「普通だと、裁判とその後の移動で約1時間、報告集会で約1時間、計2時間よね。4日は判決が5秒で終わったとなると、残りの時間は長いわね」

甘「そうね、報告集はずいぶん長かったんじゃないかしら」

私「どれくらいでした？」

甘「2時間弱はあったわね」

山「傍聴者の憤懣が大きくて、怒りの発言であふれて、長くなったってわけ？」

甘「そうじゃなくて、傍聴者もそうだったけど、その前に弁護士さんの憤懣と怒りの声が上がっていたわ。理論的って言うか論理的って言うか、この点が整合性のない裁判指揮で……という風に、弁護士さんたち、冷静に分析しているのだけど、ともかく憤懣やるかたない雰囲気だったわね」

私「先回（8月7日）の傍聴記によると、裁判官忌避直前だったようですね。そうすると4日の判決の内容はほぼ予測されていたのではないのでしょうか」

（一週一文（わ） http://npg.booo.jp/kieyuku/week_repo/170814kuriyama.pdf）

甘「弁護士さんたちや「梅田さんを支える会」事務局ではそうだったかもしれないわね」

私「ランソの山下さんなら判るでしょう」

山「判らないわよ。それとね、私は、判決は冷静に聞くようにしているわ」

私「冷静に・・・ですか？ なるほど」

山「「冷静に聞くようにしている」って言っているでしょう。冷静に受け取れるかどうかは、話は別よ」

甘「分ったわ。傍聴記はこれ。読んでみて。山下さんは冷静になれないわよ、きっと」

山「友達からひどい判決だったって聞いているので、冷静に読めるわよ。自分なりの憤懣はあるけどね」

私「この傍聴記を読むと、梅田裁判は労災が出るかどうかだけでなく、日本の裁判の嘆かわしい現状や限界をも反映しているようですね。考えさせられますね」

山「そうなのよ」と、山下さんは熱が入って少し声が高くなります。「この日本の原子力政策はね」と、山下さんは一息入れます。

山「国内の原子カムラの意向を反映しているだけじゃないのよ。国際的な原子力推進団体、これを国際原子力マフィアって呼ぶ人もいるけど、それと持ちつ持たれつの関係なのよ。これのおかげで日本の原子カムラは肥大化していけるし、この肥大化を食い物にして国際原子力マフィアはますます我が物顔に振舞えるのよ」

山下さんの熱を少し下げようと思って、私は斜に構えたコメントを出しました。

私「山下さんの守備範囲って広いですね」

ただ、山下さんには私の底意は伝わらなかったようです。

山「自分で勝手に広げているわけじゃないのよ。日本には、国際原子力マフィアと関連付けると理解できる方針や政策が色々あるのよ。ほら、この傍聴記にも被曝の実態を直視させない国際組織名が一つ、書かれているじゃない？」

私「判りました。甘酒はもう宜しいですか？」

山下さんにはこちらのテーマの方が効果的でした。

山「そう言えばのどが渴いたわね。まだあるの？」

甘「ごめんなさい。さっきの甘酒でおしまい」

私「こんなシーンで「ごめんなさい」って言うのですか？」

山「言う場合もあるわ、セーフね」

山下さんの熱は少し下がり、村長さんはいないままテントでの時間は流れていきます。

(以下 次号)

(文責 栗山次郎) 2017年12月18日公開

参照：本河知明「梅田裁判傍聴記」

http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/171218umeda.pdf